

去る九月六日に日本を立った私は、ソウル、香港を経由してシンガポールに飛び、そこから約一週間がかりでマレー半島を北上、クアラルンプール、イポ、バタールワース、ペナンを経てバンコクに到着した。

◆ 今回の旅行は、揺れるアジアの中国像をマレーシアやタイの対中国交樹立、アジアに広がる中ソ対立との関連でとらえることが目的の一つであり、また、アジアのローカルな諸現実

● 外交時評

揺れるアジアの中国像

中嶋領雄 (東京外国語大学助教授)



れるためにシンガポールからバンコクまで、一等、二等、三等の汽車を乗り継いでマレー半島を縦貫旅行してみようというのがもう一つの目的であった。

実際に右のテーマにふれてみると、同じASEAN諸国とはいいながら、シンガポール、マレーシア、タイの対中関係や中国像には、やはり、かなり大きな相違があるように思われる。シンガポールは、隣国のマレーシアがASEAN諸国の先端を切って昨年対中国交を実現し、今年になってフィリピン、タイも相次いで対中

国交を樹立したことに對し、ある意味でのあせりを感じているのではないかと一般には思われがちだが、現地ではむしろ、インドネシアと対中国交の最終打順を競うことに努めているのではないかと思われるほど、この問題ではクールである。むしろ、マレーシアやタイ、フィリピンが、国内の毛沢東型革命勢力を封ずるためにも対中国交に走ったのに、実際には、中国はこれら革命勢力への声援を再開したし、ゲリラ活動も最近とみに高まっているのではないかと

さえ見ているようである。

これに對してマレーシアは、去る四月二十九日のマラヤ共産党四十五周年記念への中国共産党からの祝電問題にも神経をとがらせ、ラザク首相は

「約束がちがうではないか」

と抗議したことが明らかになった(六月二十二日)が、中国側は、クアラルンプールに開設された中国大使館筋も、これは「党と党との関係と政府と政府との関係」だとしてわりきっているようだ。ただ、ラザク首相にとって頭の痛い

問題は、最近、首都クアラルンプールでのゲリラ活動さえ生じたように、ペラ州のイポ周辺やケダ州一帯では、ゲリラ活動がますます激化していることであり、私がバタールワースに滞在中もケダ州のバタールワース、ブキト・メタジャム、ニボン・テバルの三地区に戒厳令が発令された。このような共産ゲリラの活発化は、いわゆるマレー化政策によって抑えられているマレーシア華人の対ラザク批判に口実を与えつつあるだけに、対中国交を成し遂げたラザク政権にとっては、いら立たざるを得ないところである。

ところが、タイにおける中国像は、国交正常化以来、きわめて好転している。一時の中国ブームはようやくおさまったが、ククリット政権は対中国交によって大きく得点したといえよう。しかし、タイにとっても問題がないわけではなく、その一つは、対中正常化以来、むしろハノイがタイに再び冷たくなっていて、ハノイとの国交交渉も中断してしまったことであり、二つには、バンコクやチェンマイを中心にソ連の浸透工作が中国に對抗して激しくなっていることであり、三つには、東北タイ、北部タイのゲリラ活動がやはり激化していることである。

◇ こうして、アジアの流動のなかで、中ソ対立や中国の影の陰影はますます複雑に交錯しつつあるように思われてならない。

(九月十七日、バンコクにて)